

## ギャラリーアートもりもとに於ける個展「誌上ギャラリー」

宮澤 光造

### Exhibition in Gallery Art Morimoto “Paper Gallery”

MIYAZAWA Kozo

#### Abstract

As people's lives rapidly change in today's world, what purpose do sculptures serve in society?

One can let their voice be heard through the primitive act of stone carving.

I feel that the slow process of stone carving creates a nice rhythm with the speed at which I think about the things around me.

Also, I can not help but think that there lies something of great importance within the foolish things born from our fingertips.

Using the experience I gained from my exhibit on display at Ginza's Gallery Art Morimoto from November 8th to the 18th in 2006, I want to arrange my works once again to develop and evolve them even further.

Key Word: sculpture, stone carving, Gallery, Exhibition

#### [ 要約 ]

人々の生活様式が急激に変化していく今日、その社会において彫刻の果たす役割とは何か。石をノミで刻むという最も原始的な作業をとおして、自分自身の内側の声に耳を傾けてみる。

石彫のゆっくりとした作業の進み方は、私がものを考えるスピードとよく合っていてそこには心地良いリズムさえ感じられる。

また、人の指先から生み出される他愛無いものの中にこそ、大切なものが潜んでいるような気がしてならない。

2006年11月8日から18日まで銀座の「ギャラリーアートもりもと」で開催した個展の記録をまとめることで、私自身の彫刻をもう一度整理し新たな展開と可能性を探っていきたい。

キーワード：彫刻、石彫、ギャラリー、個展

はじめに

美術作品の発表方法は「グループ展」と「個展」の2つに大きく分けることができる。

「グループ展」の中には公募展も含まれると考えてよい。また「個展」の中には「貸し画廊」による個展と「画廊企画」によるそれがある。

東京都中央区銀座には多くの画廊（ギャラリー）が集まっており、今回の私の個展を企画した「ギャラリーアートもりもと」もその中の一つである。

この展覧会の様子を「誌上ギャラリー」として本紀要に紹介する。



ギャラリー入り口の立て看板



入り口のドア



会場の風景

1.



「おしゃべりな石」 白河石 24×62×20cm

路傍の道祖神や庚申塚のようにひっそりと、けれど確実に人々の生活空間に存在している造形。野原にある大きな樹の下でおしゃべりをしている石たち、そんな世界をイメージして人物を配置してみた。



この石は福島県白河地方から産出される安山岩である。ギャラリーはビルの2階にあり、その階段下に黒い展示ケースがあったので白色系の石を使うことにした。





「ここにいる」 スエーデン産黒御影石 29×19×24cm

少女が椅子に腰掛けている。眠りに落ちる瞬間の体が椅子の中に溶けていくような感覚をこの石で表現しようと思った。





「本が好き」 アフリカ産黒御影石 49×21×16cm

大好きな本を抱えて遠くの空を見ている少女の像。もう読み終わったのかな、お話のつづきを考えているのかもしれません。



「昔の月」 スエーデン産黒御影石 29×33×21cm

丸い丸いお月さま 星や地球の誕生に思いを馳せながら お月さまを見ていたら あらあ  
ら私もまん丸に。





「沈黙」 スエーデン産黒御影石 43×27×23cm

椅子と人体を融合させるシリーズから生まれた作品である。荒い石の椅子の中に人物を閉じ込めてみた。





「風の家路」 インド産黒御影石 45×38×20cm

追い風 よこ風 向かい風 ひと仕事終えた風の子は、温かいお家へ帰って行きます。



「もう一度」 インド産黒御影石 38×29×23cm

一度完成してグループ展に発表したのだが、改めて見てみたら気になる所がたくさん出てきた。失敗しても良いくらいの覚悟で手を入れ直したら、石の中から何かが語りかけてきてくれた気がした。





「影」 インド産黒御影石 51×24×20cm

人が人に出会うということ、人が人と別れるということ。  
 ひとり一人にそれぞれのドラマがあるから、作曲家や小説家がいるのだ。  
 そして彫刻家の仕事もそのようなものだと思う。





「シャボン玉」 インド産黒御影石 32×32×16cm

息子がまだ小さかった頃、お金はないけれど有り余る時間を持っていた私はよく公園で息子と遊んだ。

この作品の題名がなぜ「シャボン玉」なのかと聞かれると、返事にとっても困るのだがその頃の記憶が甦り、どうしてもこのタイトルを付けたいと思った。



「ひと休み」 インド産黒御影石 30×21×18cm

ギャラリーの芳名帳を置くテーブルの上を想定して作った作品である。石の彫刻は屋外に置くことによって雨や雪、また太陽の光の加減でその表情を変え楽しむことができる。しかし、この作品は室内に置いて欲しい。

日々の暮らしの中で「そんなに頑張らないでもいいよ」とこの彫刻に語らせた。



おわりに

私のアトリエには水道がない。石の仕事は磨きなどで水が必要だし、一日の終わりには手や顔だって洗いたい。仕方がないから雨水を溜めたり、近くの小川からバケツで汲んだりして使っている。およそ現代のライフスタイルとはかけ離れた環境での制作である。

そういえば学生時代、卒業制作が間に合わないで徹夜で石を磨いたことがある。雪の多い年で、その晩も雪がズンズン降っていた。水道はとうに凍りついていて私たち学生は雪の中で焚き火をし、その炎の上に雪の入ったバケツを掛けて水を作った。

この経験や教育が今の私の制作の礎になっていることは、言うまでもない。

一見制作とは関係ないような、また無駄に思えるような経験の積み重ねが作品を考えるときに生きてくる気がする。

私の彫刻のテーマは「人間」であり、そこで表現したいことは言葉になりづらい「人間の思い」である。子供の像が多いけれどそれは子供の中に「人間の原型」を感じるからであり、ただ可愛いだけの人形（ひとがた）では困ってしまう。なぜならば芸術作品の持っている本当の力とは、その作品を見た人の心を驚づかみにしてプラスの方向へ引きずり上げる力であると思うからである。

昨日と同じ制作の繰り返しの中から私自身の感受性や思考の深化を図り、人間の存在を肯定する表現を求めている。

